

ルカ 24 章 13～35 節「イエスだと分かった」

復活されたイエス・キリストがエマオの途上で二人の弟子に現れたことは、私たちにも起こりうることです。

1. イエスであることが分からなかった（：13～18）

イエス様がよみがえられた日、週の初めの日の午後の出来事がこの箇所に記載されています。弟子たちのうちの二人がエルサレムからエマオという村に向かって歩いていました。二人が話すことと言えば当然イエス様をめぐる出来事、殊にこの三日間に起こったことについてだったでしょう。

二人があれこれ話しながら歩いていると、そのうちに別の一人が彼らに近づいて来て、一緒に歩いていました。その人はよみがえられたイエス様でしたが、二人には分かりませんでした。不思議なことですが、「二人の目はさえぎられて」いたというのです。

近づいてきたその人が「歩きながら語り合っているその話は何のことですか」と問うと、「二人は暗い顔をして立ち止まりました。二人の心境が現れています。どうしてそのようなことになったのか理解できず、受け止めきれず、これからどうしたら良いのか分からないのです。絶望、不安、混乱などがいっぱい目が見えられなかったのです。」

何か起こった出来事を受け止められなかったり、キリスト教信仰について疑問が浮かびその解決を得られなかったり、キリストの復活についてどう考えたらいいのかわからずいたりして、暗い顔をしてその状態のまま止まってしまうことがあると思います。自分たちの視点で、また人間の可能性の範囲内で考えていたら、限界があり、理解できないことも多いでしょう。しかし、そのような時にも主は共にいて、助けを与えてくださいます。私たちの目はまださえぎられていても、主イエス様はすでに導きを与えていてくださるのです。

かつてイエス様は弟子たちに、「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。あなたがたのところに戻って来ます」（ヨハネ 14:18）と約束されました。そのように主イエス様は、この二人がイエス様だと分からないうちから彼らに近づき、彼らと共に歩いてくださり、彼らの状態に寄り添ってくださったのです。

2. 聖書から説き明かされた（：19～27）

二人はイエス様のことを彼らなりの理解を加えて話します。

19 節。確かにイエス様の働きには「預言者」としての面はありますが、それだけではありません。不十分な理解です。イエス様のことをあくまでも人として見えています。

20 節。イエス様を引き渡したのも、十字架につけたのも指導者たちの責任だと言っています。イエス様が十字架刑にされてしまったことを嘆きながら、どう考えたらいいのだろうという疑問や迷いが表れています。

21 節前半。当時のほとんどのユダヤ人は、旧約聖書の預言はメシアがユダヤの国をローマから解放することを指し示していると考えていました。弟子たちも同じでした。ですから、イエス様が捕らえられ、十字架刑にされてしまった時、期待が大きかっただけに、裏切られたとの失望も大きかったでしょう。

しかし、実のところは、イエス様が十字架で死なれ、よみがえられたからこそ、罪の赦しを与えられ、失望に終わらない希望が与えられるのです。弟子たちでさえも、まだこの時はそれが分かっていませんでした。

その上、さらに分からないことが起こったと言います。21 節後半～24 節。イエス様のからだが見当たらないという事実にとだ驚くばかりです。御使いが告げたということ、イエス様が生きておられるということを受け止めきれません。信じることができません。それで二人は暗い顔をしていました。戸惑っていました。

このように人が自分の考えの中に留まっていたら、死に勝利する復活ということは全く思いもよらないことであり、受け入れられないことなのです。

しかし、主イエス様は二人に語り、神様のみわざを説き明かします。25～26 節。旧約聖書に記載されていたメシアつまりキリストに関する預言のすべてが成就することを信じないことが「愚か」なのです。

キリストは苦しみを受けなければなりません。しかし、それで終わりではなく、それから栄光に入るはずでした。キリストは苦難を通して後に勝利するのです。

その「預言者たちの言ったことすべてを」信じるができるように、イエス様は聖書を説き明かされます。27 節。イエス様が旧約聖書を神のことばと認めて、その様々な箇所からご自分について書いてあることを説き明かされたのです。これが大事なことです。聖書のみことばによって私たちは真理に導かれます。みことばによってイエス・キリストを本当

に知ることができます。みことばによって、絶望の中にも希望が与えられるのです。「これこそ悩みのときの私の慰め。まことに あなたのみことばは私を生かします」(詩篇 119 : 50)。

3. イエスだと分かった (: 28~35)

二人の弟子は聖書全体からキリストについて説き明かされる話を聞くうちに、心が変えられていきました。旧約聖書に示されているキリストについて、その受難と栄光を理解したことでしょう。そして、自分たちが従ってきたナザレ人イエス様において旧約聖書が成就していることを知り、イエス様こそキリストであると信じるようになったでしょう。イエス様の十字架は預言の通りであった。ならば、その後のよみがえりもあるはずだ、イエス様は生きておられると信仰を与えられていったことでしょう。

そうして三人はエマオの村に着きましたが、聖書を説き明かしてくれた人はもっと先まで行きそうな様子でした。そこで二人の弟子が強く勧めて、三人は一緒に家に入り、食卓に着きました。パンを取って神をほめたたえ、裂いて二人に渡しました。すると、二人の「目が開かれ」、目の前にいる方がイエス様だと分かりました。そして次の瞬間、イエス様は見えなくなったというのです。

それまで分からなかったのに、どうしてこの時分かったのでしょうか。さえぎられていた彼らの目が開かれたということには、神様のみわざがあったと思われまふ。そして、同じような神様のみわざは私たちにもなされるのです。以前はイエス様のことが分からないでいたが、聖書の説き明かしを聞き、イエス様が救い主であることを知るようになり、やがてイエス様を信じ、自分の人生の主とする決心をするようになるのです。そうして、救い主イエス様が分かると、イエス様を直接目で見るのがなくても、それは問題ではないのです。みことばの証言を受け入れているからです。

二人は一緒に歩いてくださり、聖書を説き明かして下さったことを振り返って話し合いました。32節。イエス様が確かによみがえって生きておられること、自分たちと共に歩いてくださり、聖書を説き明かして下さって、それでイエス様が救い主であることが分かったことを、二人は深く感動し、感謝したことでしょう。

「心は内で燃えていた」と言っている「燃える」ということばは「明かりをともす」とも訳されている言葉です。私たちが聖書のみことばを読むとき、聞くときに、みことばと共に聖霊なる神様が働かれて、私たちの心に光を照らして下さるのです。聖霊なる神様が、私たちにみことばを分かせてくださいます。神様への信頼や感謝や悔い改めや決心に導いてくださるのです。そのようなときには心が内で燃えています。

二人の弟子はこのような経験をして、すぐに行動しました。弟子たちの集まりから離れて行った二人は方向転換して、弟子たちの交わりに戻って行きました。イエス様が十字架で死んでしまい、イエス様のことをどう理解したら良いか分からなくなって、弟子たちはバラバラになりそうだったのでしょう。しかし、救い主イエス様のことが分かって、弟子たちは一つにされていくのです。

弟子たちの交わりに戻ったこの二人の弟子は、自分たちが経験した復活された主イエス様との出会いのことを話しました。そのことから推測すると、彼らは、その後の生涯においても、自分たちの経験したこと、イエス様が旧約聖書から説き明かして下さった内容を人々に宣べ伝えていったのではないかと思います。主がご自身のことを分かせて下さるろうとして、共に歩いてくださること、そして、みことばによって心を燃やして下さることを証ししていったと思われまふ。

このように、みことばによってイエス様のことが分かり、イエス様と出会うと、生き方が変えられます。真理に対してさえぎられていた目が開かれて、絶望の中に希望が与えられて、教会に背を向けていた者が教会に加えられ、神様の恵みの御業を証ししていくのです。そのような変化を神様が与えてくださるのです。

主イエス様だと分かったことと似たような経験を、クリスチャンはそれぞれの人生の中で経験しました。イエス様のことが分かり、信じて救われ、教会で共に歩むクリスチャンそれぞれの経験こそ、主イエス様がよみがえり、今も生きて、働かされている証拠です。

これまでイエス様が分からなかった方も、ぜひこのような神様の恵みによる歩みに加わっていただきたいと願います。みことばの説き明かしを聞き続けていただきたいのです。イースターの本当の喜びを味わうことができるようになります。そのために祈っています。